

まくずやき
眞葛焼 (1)

眞葛焼の概要

眞葛焼は初代香山が横浜に窯を開いて制作した焼物です。

横浜に開窯した当初は陶土探しに苦勞し、香山自ら2年かけて関東一円を探し歩いたとされています。

開窯当初に眞葛窯で作っていたのは、京焼風の色絵磁器や薩摩風陶器でした。

やがて香山は彫刻的な装飾を施して立体的かつ写實的に表現された「高浮彫(たかうきぼり)」の制作を手がけます。

明治10年代半ば頃から香山は、陶器制作から磁器制作へと轉換を図ります。

釉薬に関して研究を重ねた香山は、当時欧米でも類の少ない「釉下彩(ゆうかさい)」の技法を確立します。「釉下彩」は優美で表現豊かな磁器作品となりました。

眞葛焼は、父長造が京都眞葛ヶ原に窯を築いた折、「眞葛焼」の名を与えられたことに由来します。

眞葛焼 (2)

特色1：高浮彫(たかうきぼり)

高浮彫は、香山が独特の表現技法として確立したもので、陶器の表面をリアルな浮彫や造形物で装飾しています。

横浜で開窯した当時の香山は、海外で好まれていた薩摩焼風の陶器を制作しましたが、これには多くの金が使用されていたことから、高額になることや貴重な金の海外流出などの問題がありました。

香山はこれを防ぐために作風を転換し、独創的な高浮彫を生み出しました。

高浮彫には、立体的かつ写実的な造形で、鷹や猫などの鳥類・動物、蓮や葡萄といった植物など、様々なモチーフが描かれています。

初期の高浮彫は部分的な立体造形でしたが、徐々に作品全体に立体的な装飾が施されるようになっていきました。

しかし、香山が高浮彫を制作したのは、長い作陶生活の中で、僅か数年のことでした。

眞葛焼 (3)

かつゆうかにはりつきだいつきばち
水鉢(褐釉蟹貼付台付鉢)

重要文化財

1881(明治14)年の第2回内国勸業博覧会
に出品された作品。有功賞牌一等を受賞。
2002(平成14)年に近代制作の陶磁器とし
ては初めて重要文化財に指定されました。



東京国立博物館所蔵

Image: TNM Image Archives

香山には同形の作品が他に2点あります。

眞葛焼 (4)

特色2: 釉下彩(ゆうかさい)

香山は、明治10年代半ばから、釉薬の研究に力を注ぎます。眞葛窯の運営を養子で甥の、2代目香山となる半之助(はんのすけ)に継がせ、自身は青磁、窯変などの釉薬技法を導入した作品を発表して、眞葛窯の主力製品を陶器から磁器へと切り替えていきました。

香山は、中国の青磁や白磁、辰砂釉、窯変釉などを深く研究し、自分の技法としたほか、当時類例の少ない釉下彩の技法の磁器制作に成功しました。

釉下彩は、描いた下絵に透明な釉薬をうわがけし、高温で焼成する技法で、濃淡と奥行きのある表現を可能にしました。

釉下彩の作品は、濃厚な作風に飽き、清楚淡泊なものを好むようになっていた海外でも高い評価を受けました。

釉下彩の作品は、当時欧米で流行した、アール・ヌーヴォー様式と相互に影響しあったといわれています。

眞葛焼 (5)

おうゆうさびえばいじゅもんたいへい
黄釉銹絵梅樹文大瓶

重要文化財

1893(明治26)年のシカゴ・コロンブス世界博覧会に出品された作品。金牌を受賞。

2004(平成16)年に重要文化財に指定されました。



東京国立博物館所蔵

Image: TNM Image Archives

眞葛焼 (6)

釉下彩作品の紹介

神奈川県立歴史博物館には、寄託を受けている「田邊哲人コレクション」の他に、館蔵の眞葛焼があります。

歴史博物館では、開館準備時代より近世、近代部門の資料収集を継続し、陶磁関係資料として収集した宮川香山の作品87点を収録した、『神奈川県立博物館人文部門資料目録(10) 宮川香山作品目録』(展示ケース4)を1989(平成元)年に発行しました。



百鬼夜行図花瓶



色絵香炉

眞葛焼 (7)

香山窯について

■ 眞葛窯の所在地

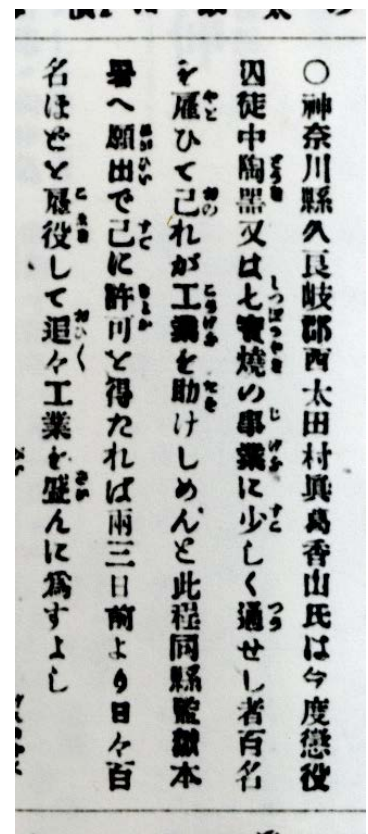
香山は1870(明治3)年横浜へと移住し、最初は野毛山の花屋敷(現・横浜市西区老松町)に窯を築きました。

翌1871(明治4)年、太田村不二山下(現・横浜市南区庚台)で開窯し、本格的に陶磁器の制作を開始しました。

■ 窯場の規模

眞葛窯の敷地は1,000坪におよび、100人以上の工人が働く、大規模工房でした。

1881(明治14)年8月9日の『東京横濱毎日新聞』の記事には、懲役囚の中から陶器や七宝焼きの心得のある者100名を雇い入れる事が記されています。



『東京横濱毎日新聞』

明治14年8月9日3面

眞葛焼 (8)

帝室技藝員

1890(明治23)年に任命が始まった、帝室技藝員の制度は、帝室(皇室)が伝統的な日本の美術・工芸を保護・奨励するために設けられたもので、明治時代の美術家にとって国から最高の評価を受けることを意味しました。

この制度の下で1944(昭和19)年までの間に13回の任命があり、合計で79人が選ばれています。そのうち陶芸界からは、清風與平(三代)、宮川香山(初代)、伊東陶山(初代)、諏訪蘇山(初代)、板谷波山の5人が任命されています。

香山は、1896(明治29)年に陶芸界から2人目の帝室技藝員に任命されました。この際の肩書は「陶業」とされ、先に「陶工」の肩書で任命された清風與平とは異なり、陶器制作の評価に加え、国際的競争力を有する工房の経営手腕をも高く評価されたものと思われます。

眞葛焼 (9)

終焉

■ 横浜大空襲による香山窯の焼失

1945(昭和20)年5月29日の横浜大空襲により、3代香山葛之輔(かつのすけ)が家族・職人共に罹災し、亡くなりました。窯場も焼失し、このため眞葛焼に関する多くの資料が失われました。



横浜市が設置した窯場跡の案内板

(職員撮影)

■ 香山4代での終焉

戦後眞葛焼の再興をめざし戦災から立ち直ろうと努力した4代香山智之助(とものすけ・3代葛之輔の弟で平塚に疎開していて難を逃れました)ですが、1959(昭和34)年7月7日、復興の叶わないまま亡くなります。

これにより眞葛焼は廃窯となり、香山の名も絶え、眞葛焼は幻のやきものとなりました。

眞葛焼コレクション(1)

田邊哲人コレクション

■田邊哲人氏について

眞葛香山研究の第一人者である田邊哲人氏は、昭和40年代前半、20代の頃より眞葛香山の研究を始め、以後約50年間にわたり研究を続けながら、世界中から探し出した眞葛香山を初めとした「横浜焼」、「東京焼」のコレクションを構築しました。

■田邊哲人コレクション

サントリー美術館で開催された「没後100年宮川香山」展をはじめ多くの展覧会にコレクションは貸与されています。

コレクションの一部は神奈川県立歴史博物館に寄託されていて、博物館ではこの寄託資料を基に2014(平成26)年に「眞葛焼―田邊哲人コレクションと館蔵の名品」展を開催しました。

眞葛焼コレクション(2)

神奈川県立歴史博物館

1904(明治37)年に横浜正金銀行として建てられ、現在は国の重要文化財・史跡に指定されている歴史的建造物です。「かながわの文化と歴史」を総合的に扱う唯一の博物館です。

宮川香山の作品は、釉下彩作品の他にも仁清写の作品などを所蔵しています。

また、田邊哲人コレクションの一部を寄託されています。

博物館HPで「眞葛焼館蔵コレクション」43画像が見られます。

館蔵品

青華岩二竹之図蓋付壺

■所在地

横浜市中区南仲通5-60

■Tel 045-201-0926

■開館時間 9:30~17:00

■休館日 毎週月曜日

※2018(平成30)年4月
まで休館中

■<http://ch.kanagawa-museum.jp/index.html>



眞葛焼コレクション(3)

宮川香山 眞葛ミュージアム

『世界に愛されたやきもの MAKUZU WARE 眞葛焼 初代宮川香山作品集』(展示ケース4)の著者、山本博士氏のコレクションを公開しているミュージアムです。

コンパクトな展示空間には、作品を360度から鑑賞できる展示ケースもあり、高浮彫や釉下彩の作品をはじめ、仁清・乾山写しの作品など、宮川香山の多彩な作家像が偲ばれます。

■所在地

横浜市神奈川区栄町6-1

ヨコハマポートサイドロア参番館1F-2

■Tel 045-534-6853

■開館日

土曜日・日曜日のみ

■開館時間

10:00~16:00

■<http://kozan-makuzu.com>

